展示・収蔵品より

美を知る 345

県立博物館（秋田市）

オオセイボウの生態

したたかに生きる「宝石」

今年、当館には「家の中に青いハチが入ってきた」「庭で青く輝くハチを見た」という問い合わせが例年以上に多く寄せられた。その正体はオオセイボウというハチである＝写真1、2。

オオセイボウが属するセイボウ類は、日本では39種の生息が知られている。漢字で「青蜂」と書くこのグループは、全身に金属光沢が広がり、光の当たり方で青から紫へ、時に深い赤みを帯びながら多彩な輝きを放つ。宝飾品のようなその色彩は、色素ではなく外骨格表面にある微細な凹凸構造によって光を反射させる「構造色」によるため、色あせることはない。小型ながら、光の角度で滑るように色が変わる姿は、まさに「飛ぶ宝石」である。

しかしその美しさの裏には、寄生者としてのしたたかな生き方が隠されている。セイボウ類は英語で「cuckoo wasps」（カッコウバチ）と呼ばれ、これは鳥のカッコウが隙を見てモズやオオヨシキリなど他の鳥の巣に卵を託す習性に似ることに由来する。セイボウ類は自身では巣を作らず、寄生する別のハチの巣に侵入して卵を産みつけ、孵った幼虫は元々の巣の持ち主の子どもや、子のために用意された餌を食べて成長するのである。オオセイボウの場合、スズバチ（写真3）という狩蜂の巣を狙って産卵する。

狩蜂とは狩人蜂とも呼ばれ、その名の通り腹部末端の刺針で殺さない程度の毒液を注入し、昆虫やクモの運動能力を奪って巣に運び込み、わが子のための食料にする、まさに「狩りをするハチ」である。私たちが「ハチ」で想像するのは、ミツバチのように女王蜂や働き蜂など、分業し社会性を持つハチかもしれない。しかし、大部分の狩蜂は巣作りから、狩り、給餌まで、母蜂が単独で行う。

スズバチの母蜂は、泥で作った巣にシャクガの幼虫（シャクトリムシ）を運び入れて、自身の幼虫の餌とする。最終的には外側を泥で塗り固めた半球状の巣を作り上げる＝写真4。一方、スズバチの巣への産卵を狙うオオセイボウは、スズバチの子育て準備の様子をうかがいながら、スズバチが巣を離れた一瞬を逃さず、巣穴に侵入し卵を忍ばせる。見つかれば激しい攻撃を受ける可能性が高いが、オオセイボウの背面は硬く、身の危険を感じると体をダンゴムシのように丸め防御姿勢を取る。胸部に粗く刻まれた点刻とメタリックブルーの輝きは、まるで身を守る鎧のようである＝写真5。

オオセイボウは、秋田県レッドデータブックでは情報不足種（DD）に位置付けられている。これは、本種についての情報がまだ十分に蓄積されていないことを示すものであり、今後の調査や目撃の積み重ねによって、まだ知られていない生態が明らかになる可能性を示している。他のセイボウ類も同様で、県内にどれだけの種類のセイボウが暮らしているのかさえ明らかになってはいない＝写真6、7。日本に生息する39種のセイボウ類のうち、寄生する相手が判明しているものは21種だけとされ、全国的にも生態解明は途上にある。

家の外壁や石に不自然な泥の塊が付いているのを見つけたら、セイボウとの思いがけない出合いがあるかもしれない。私たちの小さな気付きは、いつか新しい発見につながっていくはずである。

（県立博物館学芸主事・藤中由美）

写真1　花に訪れたオオセイボウ（撮影・梅津一史氏）

写真4　スズバチの巣（撮影・梅津一史氏）

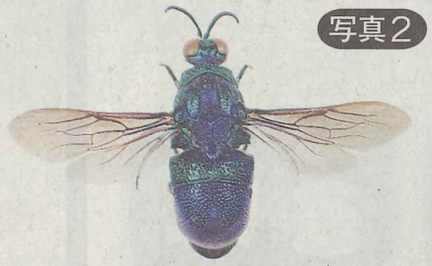

写真2　オオセイボウ標本（体長約13ミリ）

写真3　スズバチ標本（体長約25ミリ）

写真6　県内で捕獲されたナミハセイボウの標本（体長約8ミリ）

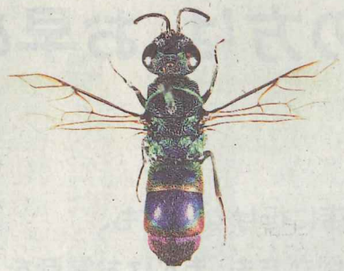

写真7　県内で捕獲されたホソセイボウの標本（体長約10ミリ）。胸部は青緑色で、腹部は紫から臙脂（えんじ）に変化し、金色の帯が光る

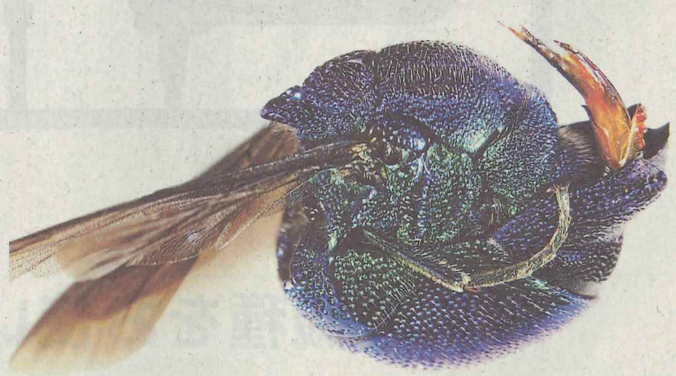

写真5　オオセイボウの防御姿勢。腹の末端に長い産卵管を備える雌（標本）。刺針としての機能はない